

構造家・高橋一正

渡辺邦夫の軌跡とともに

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■七不思議

本コラムに登場した構造家で、構造設計集団【SDG】の出身が多いのを覚えている読者もいるだろう。今建築界で活躍している構造家がたくさんいるということだ。そのSDGで、創業1年目から38年間、重鎮として構造設計をしてきたのが高橋一正さん。代表の渡辺邦夫さんを言動や風貌もカリスマ性溢れる個性派というなら、高橋さんは老舗旅館の旦那か、一途な研究者のような眉目秀麗な人である。きわめた人ならそれぞれの仕事のスタイルをもつことは構造家にしても同様。師匠とはまったく違うタイプの構造家がニョキニョキ育ったのがSDGという土壌なのです。

日本大学には付属高校からの流れで入学。図面をみるのが好きだったので化学で入り、建築へと進む。構造家・坪井善勝先生（1907～1990年）が日大にいた頃だったのが幸いして、3年生になると特別講義が受けられた。構造家・斎藤公男さんが日大で助手をしていた頃の話である。ときが悪く、学生運動が影響して大学院に行かなかった。斎藤先生に、構造事務所への就職を相談して、紆余曲折あり木村俊彦構造設計事務所から独立する渡辺邦夫さんのところへ行くことになった。中目黒の僅か13m²のマンションの一室が職場になるとは思いも寄らなかった。コンピュータのない時代には、設計が終わってから構造数量を拾うのも大仕事。計算尺と算盤で徹夜は当たり前。そんな中で始まった長いSDGでの人生を「続いたのは自分も七不思議です」とおだやかな口調でいう高橋さんなのです。

■幕張メッセと木村俊彦

渡辺邦夫先生の魅力を覇志堂があらためて聞く。即座に、「同じものは二度とやらないという姿勢」。それは高橋さんが退所するまで、いや今でも貫いている師匠なのだ。美しい図面を描くのは有名で、誰も

真似のできない程のスピードで描くのだという。「図面がきたないと相手は見てくれないぞ」と教えられた。特異なエンジニアとの日々は、渡辺邦夫さんの師である木村俊彦先生とのかかわりももたらしてくれた。渡辺先生が木村事務所を退所した時点で多少あった師弟間の確執。それも超えて、幕張メッセでは協働することに。昭和62年の幕張メッセの竣工図には木村俊彦構造設計事務所+構造設計集団【SDG】の表記がある。高橋さんは孫弟子として木村先生から直接指導を受けるチャンスから何を得たかと聞くと、「構造家としてのプライド」を挙げた。「自分の設計は間違いないという確固たる自信」、現場ではコンクリートの打設のときには「黙って見ていないで手伝いなさい!」、原寸を引いている鐵工所では「職人に敬意を払いなさい!」、などの怖い注意もでた。社会人としてエレベータの乗り方まで教えを受けたのでした。高橋さんにとって、多くの建築の中で幕張メッセが一番心に残っている所以でもあるのです。

■原田玄とMETA STRUCTURE INC.

SDGの仕事が海外へ移ったことなどでSDGから身を引くことにした高橋さんは、年代は違うが同僚の原田玄さんと構造事務所を開くことにした。渡辺邦夫さんから得た構造デザインを軸として、構造設計に取組む才能ある原田さん。覇志堂も期待する門下生の一人なのです。事務所をシェアする磯野由佳さんも構造家としてイソノ設計室を営む門下生。「渡辺邦夫の呪縛から逃れられないのが私たちです」と、誇らしく語るのです。

